様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０３０６

研究課題名（和文）アメリカン・ルネッサンス文学にみる旅の表象と旅行文学の系譜

研究課題名（英文）Representations of Travel and Travel Writing in American Renaissance Literature

研究代表者
城戸　光世（KIDO, MITSUYO）

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：１０３５１９９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アメリカン・ルネサンスと呼ばれる19世紀中葉頃に活躍した作家たちの諸作品における旅の表象や実態を分析し、彼らの旅行記をアメリカ旅行文学の系譜に位置づけるものである。成果としては、学会発表や論文等で彼らの旅行記に注目を集めることができたこと、とりわけ、これまで作家ホーソーンの妻としてのみ注目されていたソファイア・ピーボディ・ホーソーンを旅行記作家として評価し、19世紀アメリカ文学キャノンの空間的・ジェンダー的・ジャンル的広がりに貢献できたことであろう。またマーシャル著『ピーボディ姉妹』翻訳刊行などによって同時代の女性たちの幅広い越境的活躍を紹介することができたことも大きな成果である。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted to analyze the various representations of travel in the works of American Renaissance writers such as Hawthorne or Fuller, and placed their works in the genre of travel writing, which has been paid much more attention in recent years from many academic disciplines. The largest contribution of this research to the study field of American literature in Japan is that it has succeeded in showing that Sophia Peabody Hawthorne, who has been known in Japan maily as the wife of the famous American Renaissance writer Nathaniel Hawthorne, was herself a good writer of travelogues as well as a keen observer of Cuban nature and society which she witnessed before she got married to Hawthorne or of England and Italy where she went with her family in her middle years. The results of this study are included as articles in some important books on the study of American Renaissance literature.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカン・ルネサンス　旅行記　Nathaniel Hawthorne　Sophia Peabody Hawthorne　Margaret Fuller

１．研究開始当初の背景

19 世紀前半から中葉にかけては、蒸気機関の発明や運河や鉄道の登場など、交通革命と呼ばれる移動・輸送手段の飛躍的な発展があり、そのようなテクノロジーの進歩を背景に、かつては裕福な特権階級のみに可能であった遠方への旅を多くの人々が享受できるようになっていた。この時代は、ちょうどアメリカ文学において数々の傑作が生み出され、のちに F・O・マシーセンによって「アメリカン・ルネサンス」と名づけられるようになった文芸復興の時期と重なる。この時期、独立戦争（1775－1783）と米英戦争（1812）を経たアメリカでは、1830 年代の恐慌のような経済的不安定さを抱えながらも、政治的には外交情勢も落ち着き、ナポレオンからのルイジアナ購入や移民の増加、「マニフェスト・デスティニー」による拡張主義などによって、13 植民地時代の領土が西へと急速に拡大し、新生国家としての成長著しい時代であった。アメリカン・ルネサンス期を代表する作家ナサニエル・ホーソーンは、若い自分に行ったアメリカ北部への旅のなかで、当時文明の進歩を象徴すると考えられていたエリー運河の運河船に乗り、その経験を元にした作品を発表しているが、ナイアガラの滝やその周辺がすでに観光地化され、無数の過去の記録や絵画などでそれらの風景や土地のイメージがステレオタイプ化されていることを記録している。同じくニューヨークからナイアガラの滝を回り、五大湖と周辺のシカゴやミルウォーキーなどの町を訪ね *Summer on the Lakes, in 1843*（1844）を著したマーガレット・フラーや、「極西部（Far West）」に行き大平原を記録しようと西部探検隊とともに西へと旅をし、*Tour of the Prairies*（1832）を記したワシントン・アーヴィングなど、当時アメリカ西部へと旅をし、開拓地が町として発展していく様を目撃し、それらを記録した作家たちは数多い。またナポレオン戦争などによるヨーロッパ大陸の政治的動乱も一応収束し、交通網が発達した 19 世紀中頃には、多くのアメリカ人作家たちが大西洋を渡ってヨーロッパへ向かい、その大陸旅行の記録を行った。アメリカン・ルネサンス作家のヨーロッパ旅行記・観察記としては、前述ホーソーンの、*Our Old Home* のような生前出版された旅行記から *English Notebooks* や *French and Italian Notebooks* のような日誌、あるいは *Tribune* 誌に送ったフラーの海外特派員報告記事、さらにはエマソンのイギリス観察記 *English Traits* や、ストウの *Sunny Memories Of Foreign Lands* なども挙げられる。

19 世紀アメリカ人作家たちと旅というテーマについては、そのヨーロッパ滞在経験や西部、観光地への旅が、18 世紀以降旧大陸で盛んに行われていたグランドツアーとの関連から、あるいはサブライムやピクチャレスクなど風景美学の観点から、かねてより研究の対象となってきた。たとえば Joy S. Kassan 著 *Artistic Voyagers: Europe and the American Imagination in the Works of Irving, Allston, Cole, Cooper, and Hawthorne* (1982)では、いかにヨーロッパ滞在が五人の作家・芸術家たちの人生と芸術における転換点となったかが分析され、また Beth L. Lueck 著 *American Writers and the Picturesque Tour: The Search for National Identity, 1790-1860* (1997)においては、様々な国内観光地への旅が流行していたアメリカにおいて、作家たちがどのように「ピクチャレスク」な旅を行い、風景に国家のアイデンティティを見出そうとしていたかが検討されている。しかし研究開始当初には、作品に表象された風景や風景美学の分析や、作家たちにとっての旅の意味だけでなく、旅行記というジャンルそのものへの関心が高まりつつあった。旅行文学や旅という行為そのものに対するコロニアリズムを指摘する今や古典となった Mary Louise Pratt の *Imperial Eyes*: *Travel Writing and Transculturation*（1992）はもとより、旅行文学の研究が盛んになるにつれて、国家アイデンティティ定義の必要性を強く意識していた 19 世紀アメリカ作家たちにおいても、新たに旅行文学というジャンル研究の視点から、総括的に彼らの作品に見られる旅の表象が研究されるようになっていた。アメリカの旅行文学についての論考も、*The Cambridge Companion to American Travel Writing* (2009)をはじめ、Terry Caesar 著 *Forgiving the Boundaries: Home As Abroad in American Travel Writing*（1995）や、Larzer Ziff 著 *Return Passages: Great American Travel Writing, 1780-1910*（2000）、Justin Edwards 著 *Exotic Journeys: Exploring the Erotics of U. S. Travel Literature, 1840-1930* (2002)など数多く登場し始めていた。一方日本では、亀井俊介編著『アメリカの旅の文学――ワンダーの世界を歩く』が、アーヴィング、フラー、ソロー、トウェインら 19 世紀アメリカ作家たちの旅文学を取り上げ紹介はしているものの、まだまだこの分野は大いに研究の余地を残していると考えられた。

２．研究の目的

本研究においては、国内のアメリカ旅行文学研究はもとより、これらの研究においてまだ不足している観光旅行揺籃期である 19 世紀前葉から中葉にかけてのアメリカ人作家たちの旅の実態の調査と彼らの旅行記の詳細な分析を行い、旅行文学というジャンルそのものの当時の流行と、アメリカン・ルネサンスの代表的作家たちの作品との影響関係などを明らかにすることを目的とした。その際、彼らの旅がどのように彼らの創作に反映し、またそれらがどのような当時の国家アイデンティティ定義の要請やナショナリズムの

動きと連動しているのか、また風景美学といった旧来の風景表象分析における観点や場所の感覚といった新しいエコクリティシズム的な捉え方、あるいは同時代の地理学や交通テクノロジーの発展といった歴史的文脈からどのような発見があるのかにも目を配りたいと考えた。総じて本研究では、旅行文学というジャンル研究による最新の知見を背景に、旅という行為をめぐる同時代の意識とアメリカン・ルネサンス作家たちの旅の表象の分析を行うことによって、彼らの諸作品をアメリカ旅行文学の系譜に広く位置づけることを目的とした。

３．研究の方法

アメリカン・ルネサンスの代表的作家たち、エマソン、フラー、ホーソーンらの旅行記のテクスト分析や、ストウをはじめとする当時の女性たちの日誌といった資料を収集し、比較検討を行う。またヨーロッパなどの現地でのみ収集可能な 19 世紀当時の交通や旅行あるいは観光地などに関する一次資料なども現地調査によって収集する。

４．研究成果

本研究では、アメリカン・ルネサンスの時期に活躍したアメリカ作家たちのなかでも、とりわけヨーロッパをはじめ広範囲に旅を行ったホーソーン夫妻とフラーに焦点をあて、彼らの諸作品における旅の表象や実態を、当時の旅の実態や、旅をした場所・国の状況調査とともに、ナショナリズムやコロニアリズムの観点から分析し、おもには学会での研究発表や、研究書への所収論文の形で、その成果を発表した。近年ライフ・ライティングの一形式であるトラヴェル・ライティングの研究が盛んになるとともに、フラーの特派員報告やホーソーンの日誌などにもより注目が集まっているが、本研究によって彼らの旅の記録を旅行記の系譜で捉え、その学術的関心を高めることにある程度成功したのではないかと考えられる。2011 年はおもに国内での資料収集とテクスト読解の時期にあてたが、2012 年には同時期に刊行準備をしていた翻訳書『ピーボディ姉妹』（南雲堂 2014）の著者メーガン・マーシャル氏の来日にあわせ、福岡大学にてマーシャル氏らと一緒にアメリカン・ルネサンス作家たちの環大西洋交流に焦点をあてたワークショップを、また同氏が講演を行った日本ナサニエル・ホーソーン協会全国大会ではピーボディ姉妹の主要作家たちへの影響関係を探るワークショップを行った。それらの発表は注目をあつめ、近年における日本のアメリカン・ルネサンス研究の白眉である『アメリカン・ルネサンス――批評の新生』（2014）にも論文として所収されることになった。このような研究活動による大きな成果としては、これまで日本では作家ホーソーンの妻としてのみ注目されていたソファイア・ピーボディ・ホーソーンの旅行記作家としての評価の確立に寄与できたことである。現在も数々の書評で注目されることの多いアメリカン・ルネサンス関係の論集ニ冊（前掲『アメリカン・ルネサンス――批評の新生』および『越境する女――19 世紀アメリカ女性作家たちの挑戦』）に論文として所収されることによって、19 世紀アメリカ文学キャノン、とりわけ日本におけるアメリカン・ルネサンス研究の空間的・ジェンダー的・ジャンル的広がりに貢献できたのではないかと考えられる。共編者をつとめた前掲書『越境する女』とマーシャル氏の翻訳『ピーボディ姉妹――アメリカ・ロマン主義に火をつけた三人の女性たち』の刊行も、アメリカン・ルネサンス研究の裾野を広げ、旅する女性たちの海を越えた活躍を広く日本に紹介する一助となったと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

（1）<u>城戸光世</u>「シリーズ・エコクリティシズムの名作　*The Colors of Nature: Essays on Culture, Identity, and the Natural World*」　『エコクリティシズム・レビュー』4. 51-58 (2011)、　査読無

〔学会発表〕（計 4 件）

（1）<u>城戸光世</u>「世界をまたにかけるヘスターたち――ボーダーレス時代の『緋文字』考」日本ナサニエル・ホーソーン協会九州支部シンポジウム「「応答・再演行為としての文学史—アダプテーションの中のホーソーン」2015 年 3 月 28 日、福岡大学。

（2）<u>城戸光世</u>「ホーソーンとトランスアトランティック・ランドスケープ」シンポジウム「旅する 19 世紀アメリカ作家たち――自然・風景・いきもの」日本ナサニエル・ホーソーン協会第 33 回大会、2014 年 5 月 23 日、かでる２・７北海道立道民活動センター。

（3）<u>城戸光世</u>「*Notes in England and Italy*--旅行記作家としての Sophia Peabody Hawthorne 再評価」日本ナサニエル・ホーソーン協会第 31 回全国大会ワークショップ「ピーボディ姉妹とホーソーン――ヨーロッパと中南米への視座」、2012 年 5 月 25 日、日本大学。

（4）<u>城戸光世</u>「"The Queen of Journalizers"--Sophia Peabody Hawthorne as an author in Notes in England and Italy」ワークショップ *Recontextualizing the Hawthornes: What European Experiences Taught Them in the Age of Transatlantic*

Cultural Exchanges. 2012 年 5 月 20 日、福岡大学。

〔図書〕（計 7 件）
（1）城戸光世「ユートピア／ディストピア」『文学から環境を考える——エコクリティシズムガイドブック』勉誠社、2015 年、319-320。

（2）城戸光世（共編著）『越境する女——19 世紀アメリカ女性作家たちの挑戦』「楽園の光と影——ソファイア・ピーボディの「キューバ日誌」を読む」開文社、2014 年、115-140。

（3）メーガン・マーシャル著、『ピーボディ姉妹——アメリカ・ロマン主義に火をつけた三人の女性たち』大杉博昭、城戸光世、倉橋洋子、辻祥子訳、南雲堂、2014 年、13-18、330-540。

（4）城戸光世「創作への旅——旅行記作家としてのソファイア・ピーボディ・ホーソーン」『アメリカン・ルネサンス——批評の新生』開文社、2013 年、169-191。

（5）城戸光世「共和国幻想-マーガレット・フラーのヨーロッパ報告」『環大西洋の想像力——越境するアメリカン・ルネサンス文学』彩流社、2013 年、109-128。

（6）城戸光世「もう一つのファミリー・ロマンス——ハウスキーピングの物語として読む『七破風の家』」、『ロマンスの迷宮』英宝社、2013 年、43-60。

（7）城戸光世「ロマンスの廃墟／廃墟のロマンス——ホーソーンのイタリア旅行記にみるアメリカの未来図」『カウンターナラティヴから読むアメリカ文学』音羽書房鶴見書店、2012 年、21-37。

６．研究組織
(1)研究代表者

城戸　光世（MITSUYO KIDO）
広島大学・総合科学研究科・准教授
研究者番号：10351991